

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

第16回定例研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時：2023年1月28日(土) 13:00～18:30

2023年1月29日(日) 9:30～15:10

場所：ハイブリッド開催 (Zoom、AA研306室)

報告者：

床呂郁哉

身体装飾から人類進化を考えるー(その②)ー「カワイイ」/ネオテニーと人類進化  
をめぐる試論

田中雅一

オートエスノグラフィー再考：近年の日本人研究者の試みをめぐる

山越言

野生チンパンジーの道具行動の機能と進化：機会仮説か必要仮説か

3. 内容(要旨および質疑応答・議論)

身体装飾から人類進化を考えるー(その②)ー「カワイイ」/ネオテニーと人類進化をめぐる  
試論

(床呂郁哉)

要旨：

本報告は2020年12月20日に行われた報告「身体装飾から人類進化を考える—認知革命からコスプレまで」の続編である。本報告では、まず前回の報告の復習を兼ねて以下のような点から報告を行った。

本報告では、人類進化という大きなテーマに関して、身体装飾(body ornamentation)というトピックに焦点を当てて考察を試みた。ここでいう身体装飾とは、主に衣服、装身具、仮面等の着用、ボディペイント、化粧、仮装、刺青など身体加工等を含む行動の総称を指す。20世紀後半以降の先史考古学や先史人類学等の研究の進展に伴い、いわゆる「認知革命」(人間革命：Cognitive Revolution)論におけるアートやシンボリック行動への注目などの高まりの中で、装飾品を含む身体装飾に関心が高まっている(ミズン 1996 ほか)。

またヒトとヒト以外の動物における広義の身体装飾的行動の連続性も興味深い。ヒトとヒト以外の動物における身体装飾と美意識の連続性(と非連続性)に関しては、実はC.ダーウィンも『人間の由来』などで詳しく指摘している(ダーウィン 2016)。近年の生物学(動物行動学)では、例えば鳥類のオスによるメスへの求愛の文脈での美しい飾り羽根などの誇示(ディスプレイ)行動等に関する知見が蓄積されている(長谷川 2005)。こうした性的装飾や誇示行動が進化したのは、それらがつがい候補の資質と状態について、偽りのない明確な情報を示す、とする「正直なシグナル理論」や「ハンディキャップ仮説」などが進化生物学で提唱され、その批判を含む議論が続いている(渡辺 2016; プラム 2020)。その後、「正直なシグナル理論」は人間社会の装身具などの考察へも応用が試みられている(例えば Kuhn 2014)。

しかしながら、同理論の枠組みでは、装身具などの身体装飾は社会の複雑性増加に伴う社会的地位やアイデンティティの「表現」「反映」と看做されがちであるという点を報告者は批判的に検討し、むしろ人間社会においては、例えば化粧、演劇、仮装、コスプレなどを含む「正直でない」身体装飾行動に注意を喚起した。

こうした論点を前提に、今回の報告ではアジア諸国におけるいわゆるコスプレや「カワイイ・ファッション」に関する報告者のフィールドワークで得られた知見などを具体的に紹介しつつ、それらを上記の「正直ではない」装飾や身体変容の問題に深く関係する事例として考察を試みた。例えば、コスプレにおいては生得的な身体的属性(年齢やジェンダー等)だとか元々の社会的属性とは異なる見え姿への変身(変容)をその本質的要素として含む。

次に報告者は、以上の点を踏まえて、「かわいさ」(とその身体的表現)をめぐる関連分野の知見に関して検討を行った。まず生物における「かわいさ」に関しては、動物行動研究で有名なK.ローレンツのベビースキーマ論がよく知られている。ローレンツによると、ヒトを含む哺乳動物において、コドモの幼さを示す諸特徴は、オトナにとっては愛情と子育てをひきおこす「生得的解発機構」の引き金となると指摘した。またS.グールドらによる、いわゆるネオテニー(ペドモルフォーシス:幼形成熟)をめぐる議論も生物における「かわいさ」をめぐる議論において一定の参考となりうる。グールドは、20世紀の生物進化研究の領域で、長らく「忘れられていた」ネオテニー(ペドモルフォーシス)仮説を再評価する議論を

展開した (グールド 1987; グールド 1995 ほか)。更に、ヒトの文化的行動に関する文脈では、キャラクターのネオテニー化をめぐるグールドの議論がとくに興味深い。グールドはディズニーの有名キャラクターであるミッキーマウスの事例を挙げて、それが年代とともに行動面でも外形面でも、子供らしい特徴を増していくように変化しているとし、キャラクターにおいてもネオテニー化の傾向があることを示唆した (グールド 1996)。

こうした議論は興味深く示唆的だが、報告者は、それをヒトの文化現象一般に直截に当て嵌めるのは難点もあることに、日本のアニメ等のキャラクター分析を挙げて注意を促した。また日本発のいわゆる「カワイイ文化」等における「カワイイ (Kawaii)」は、英語圏における (単なる) "cute/pretty" だとか、ローレンツらが言う (コドモっぽい) 幼さ、あどけなさ、未熟さ等の要素「だけ」には還元しえない過剰さを併せ持つという点を、報告者が日本や東南アジアにおける「カワイイ文化」に関するフィールドワーク時に集めた諸事例の紹介を通じて報告した。

最後に、こうした検討を通じた総括を実施した。ヒトの装飾行動や、そこにおける「美」をめぐる議論は、近年では進化美学 (evolutionary aesthetics) などでも好んで論じられるようになった。しかしながら、R. プラムや W. メニングハウスなど一部の例外を除けば、その主流は適応主義 (新ダーウィニズム) 的な議論が支配的である (プラム 前掲書; Menninghaus 2019)。こうした状況に対して報告者は、果たして美意識や嗜好は新ダーウィニズム的な枠組み (だけ) に回収できるのか、という問題提起を行った。カワイイ・ファッションやコスプレの実践などの事例を詳しく検討すれば、そこでは適応主義の文脈にさえ回収できないような身体装飾行動としての要素を見出すことが可能であることを示唆した。

## 参考文献

- ダーウィン(2016)『人間の由来 (上・下)』長谷川真理子訳、講談社学術文庫。
- グールド S. (1987)『個体発生と系統発生—進化の観念史と発生学の最前線』仁木帝都・渡辺政隆(訳)、工作舎。
- グールド S. (1995)「ヒトの真の父親としての子ども」『ダーウィン以来—進化論への招待』pp.101-112、浦本昌紀・寺田鴻訳、早川書房。
- グールド S.(1996)「ミッキーマウスに生物学的敬意を」『パンダの親指進化論再考 (上)』pp.135-152 早川書房。
- 長谷川真理子 (2005)『クジャクの雄はなぜ美しい? (増補改訂版)』紀伊国屋書店。
- Klein, R. 2008 “Out of Africa and the evolution of human behavior.” *Evol. Anthropol.*
- Kuhn, S. L. (2014) Signaling theory and technologies of communication in the Paleolithic. *Biological Theory* 9.
- Menninghaus, W. (2019) *Aesthetics After Darwin: The multiple origins and functions of the arts.* MA:Academic Studies Press.
- ミズン、S. (1996)『心の先史時代』松浦俊輔他訳、青土社。

プラム, R. (2020) 『美の進化』黒沢令子訳、白揚社.  
渡辺茂 (2016) 『美の起源—アートの行動生物学』共立出版.

### 質疑応答と主な議論:

#### <理論的背景と「カワイイ」の概念>

シグナル理論 (Signaling theory) やハンディキャップ理論 (Handicap theory)、ネオテニー (幼形成熟 Neoteny)、ベビースキーマ (Baby schema) などの生物学的な理論を、「カワイイ」という概念に援用することの妥当性や、分析を拡張する試みについて質疑と議論が行われた。

- 生物学的な意味での honest signals やハンディキャップ理論をそのまま、「カワイイ」という概念に援用することには検討を加えた方がいい。ネオテニーの進化やベビースキーマの生物学的な適応価は、「カワイイ」という概念とは異なる捉え方をした方がいいのではないか。
  - ネオテニーの進化やベビースキーマは研究対象自身にかかわる理論であり、一方で、「カワイイ」というとらえ方はそれを認識する側の概念枠であるという違いがある。
- シグナル理論やハンディキャップ理論は性選択を説明する理論であるが、それらを用いて「カワイイ」を説明するのはやや極端な印象を受ける。
  - 「カワイイ」は性的な文脈とは異なるものであり、装飾文化の一つとしてとらえている。進化論のようなマクロなタイムスケールで語る必要はなく、Evolutionary aesthetics はあくまで参照する一例であって、その理論に回収しようとしているわけではない。
- 生物学的適応で説明される人類に普遍的な現象ではなく、そこから逸脱する新しい価値観を「カワイイ」と思う現象に注目し、なぜそのようなことが生じるのかを考えていくと進化にもつながるのではないか。
  - 芸術史においても、従来と違う様式を美しいと捉えることが実践されているので、「カワイイ」を対象として検討していきたい。
  - 性選択では直接説明できない現象を、シグナル理論やハンディキャップ理論によって適応論に回収しようとしてきた経緯があるので、慎重な検討が必要ではないか。

#### <「カワイイ文化」のとらえ方>

「カワイイ」や「カワイイ文化」について、用語としての使われ方や担い手、文化としてのとらえ方について質疑が行われた。「カワイイ」コスプレをする当事者とその周囲の人々など「カワイイ文化」の実践者による評価や、文化的他者との関係について議論が交わされた。

- 「カワイイ」は、他者を意識し支援を引き出すための方法であるとの論もあるが、どのようにとらえているか。
  - 「カワイイ」は他者を意識した概念ではなくなっている。誰にとってのかわいさなのかは重要な問題であり、異性の視線を意識した演出としての戦略ではなく、コスプレをする当事者の身体表象の様式としてとらえている。
- 「カワイイ」という概念は、「美しさ」など他の概念と対比させないと、際限なくなるのではないか。
- 「カワイイ文化」は、文化人類学のいう文化とは違うのか。
  - 流行にラベルを付けるようなタームとして使った。
- 何を「カワイイ文化」と呼んでいるのか、また、誰が「カワイイ文化」の担い手になっているのか。
  - 今日の文脈では当事者自身が「カワイイ」と名付けて実践している行動に限定したが、潜在的には人に限らず、物や状況にも「カワイイ」を拡張することができる。
  - 「カワイイ文化」やそれに関するファッションの実践者は女性が多いが、女性の異性装をする男性コスプレイヤーもいるものの、比率としては多くない。
  - 男性にも「カワイイ」を当てはめることもある。
- 思春期は大人と子供の間にある葛藤の時期とされるが、コスプレ文化にもそのような葛藤は見られるのか。
  - 年齢の幅はあるが、コスプレの対象になるものはローティーンのキャラクターであることが多い。20代前半くらいまでの人が多いので、演じる人の実年齢よりも若い人を演じることや、子供のキャラを思春期以降の人が演じることが多い傾向がある。
  - 生物学的には大人なのに子供文化を保持していると言える
  - 成熟性を含んだうえでモードあるいは遊びとして選択しているのかは、さらに調査が必要である。
- 普遍的な「カワイイ」と、「カワイイ」という文化を持たない人達による「カワイイ」文化のとらえ方は、どのように関連しているのか。
  - ベビースキーマのような普遍的な現象としてではなく、文化的な文脈として扱いたい。
  - 他者からの呼称としての「カワイイ」ではなく、自称として使う当事者も含めた実践だと認識している。

オートエスノグラフィー再考：近年の日本人研究者の試みをめぐって

(田中雅一)

## 要旨：

本発表の目的は、オートエスノグラフィーの種類を4つに分けて、それぞれの特徴や関係を明らかにした上で、現在注目されている、より自伝的なオートエスノグラフィーの事例を分析することである。

エスノグラフィー（民族誌）は大きく4つに分かれる。一つは時に民族誌学と呼ばれ、民族学(ethnology)の一分野とみなされるものである。これに対し現在では、フィールドワークに基づく質的調査の成果やその成果を生み出すための方法をエスノグラフィーと呼ぶ。この意味でのエスノグラフィーは大きく二つに分かれる。一つは、主として文化人類学者による海外でのフィールドワークに基づくエスノグラフィーである (E1)。もう一つは、社会学を中心に現れてきたもので、質的調査の成果一般を指す (E2)。執筆者は文化人類学に限らないし、内容も異文化である必要はない。その典型は、Paul Willis and Mats Trondman 2000 “Manifesto for Ethnography” *Journal of Contemporary Ethnography* (1-1 :5-16) に認められるエスノグラフィー観である。そこではエスノグラフィーの特徴として、他者との直接的かつ持続的な出会いについての豊かな記述、人間的な体験の還元不可能性についての尊重、記録、表象、そして人間的出来事の見撃に基づく記録という点が強調されている。

これに対し、オートエスノグラフィーは4つに分かれる。まず、フィールドにおける他者と自己との交流が中心主題となるエスノグラフィーである (AE1)。古くはC.レヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』やP.ラビノー『異文化理解』などを挙げることができる。

つぎに自己が前面に出てくるわけではないが、対象が異文化ではなく、自文化であるオートエスノグラフィー (AE2) である。類似の概念に Native Anthropology や Anthropology at Home がある。ただし、外からは自文化でも、当の人類学者にとって対象社会は言語は同じでも異文化かもしれない（例えば東北出身の研究者が四国を調査する場合など）。

三番目に紹介するのは、E2 に対応するようなオートエスノグラフィー (AE3) である。この対象は異文化でもフィールドワークでもない。対象は自文化であるが、家族史のようにより個人的なもの（自伝）に関わる。

最後に、オートエスノグラフィーAE4は、アメリカの文学研究家のM.L.プラッツによって提案されたもので、植民地下のエリートが宗主国の異文化記述や紀行文、報告書の言語や形式を借用して自分たちの文化や歴史について記述したものを指す。AE4はAE2の原型だとみなすことも可能であるが、AE4はどちらかというとな宗主国の異文化（植民地）記述のフォーマットを攪乱する役割を果たしてきた。これに対し、AE2は外からはわかりにくい異文化を他者（欧米など、メトロポールにいる指導教員ら）にわかりやすく提示する役割を果たしてきた。

本発表の後半では、AE3に分類されるオートエスノグラフィーとして、『文化人類学』に掲載された川口幸大「東北の関西人——自己/他者認識についてのオートエスノグラフィ」（2019, 84(2): 153-71）や同誌の「特集：オートエスノグラフィーで拓く感情と歴史」（2022, 87-2）に収められた北村毅「戦争の批判的家族誌を書く——家族のヴァルネラビリティをめ

ぐるオートエスノグラフィ」や中村平「日本軍兵士の子と孫世代のトラウマのオートエスノグラフィ——「PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」と私の運動から」を取り上げた。

AE3の中核に位置するのは仙台の地で関西人と名付けられて戸惑う私(川口)や祖父の中国戦線での体験に基づくDVに曝されてきた、脆弱な私(北村、中村)である。このようなオートエスノグラフィを批判的に考察するには、1)自己が曝されているかに見える記述から、なお隠蔽されているものが何なのかを明らかにすることであり、2)書かれた私(G.ミード的には客我me)は、書いている私(主我I)と同じではないという観点から、いかにして後者の症状に迫ることができるのかを問うことであると指摘した。日本社会においてはマイノリティであるが、家庭的には安定しかつ父が誇りの対象でもある石原真衣や陳天璽らの置かれてきた家庭状況と北村や中村の家庭状況とは大きく異なる。その相違がどのような意味を持つのか。同じオートエスノグラフィなのか、どうか。最後にこのような問いかけをすることで、現在増殖しつつあるオートエスノグラフィについての問題提起をおこなった。

#### 質疑応答と主な議論:

##### <エスノグラフィの分類について>

- オートエスノグラフィの AE1~3 は人類学の学問上の区分である。それ以外の学問的な方法をどのように位置づけるのか。例えば、社会学(例. 佐藤郁也さん)はどの分類か。  
→ 佐藤郁也さんに関しては、自分自身とフィールドの話が含まれているため、人類学の分野ではないが AE1 に近いのではないか。
- 「ルポルタージュ」というジャンルがあると思う。どのカテゴリーの位置づけになるのか。例えば、濱野ちひろさんの「聖なるズー」は、「主我 I」と「客我 me」と「他者」が全て登場する。  
→ もとになっているのが修士論文なので、「聖なるズー」は AE1 に属するのではないか。
- 「当事者研究」というものがあり、障害や病気を持った本人が、症状や日常生活上の苦労など、自らの困りごとについて言及をするものがある。当事者研究はどのカテゴリーとなるのか。  
→ 一般的には、オートエスノグラフィと当事者研究は近いといわれている。AE3 に分類してよいと思う。

##### <オートエスノグラフィの分類: AE3 と AE4>

- AE3 と AE4 のちがいはなにか。  
→ AE3 の著者は研究者であり、AE4 の著者は研究者ではないという違いがある。AE4

の категорияは、文字を使える人が自分たちについて書いたものである。例えば、江戸時代に初めて英語を学んだ日本人が、日本について英語で紹介するというようなもの。その人自身は登場しない場合もある。

- 研究者と非研究者では、なにが異なるのか。
  - AE4 は読み物や史記の形式で書かれており、「論文」の形式で書かれてはいない。
- 「論文」が査読を通るにはいろいろな判断基準がある。「論文」の形式の中のなにがAE3に分類される要素となるのか。
  - AE3とAE4の区分に、なぜ査読を持ちだしたかという文体の問題だからである。例えば、川口(2019)は東北の関西人について論文を書いているが、本来ならば関西弁で書くべきだがそれでは「論文」として認められない。
- 標準語でかけばよいということか。私は霊長類学者で、文化人類学者ではないが標準語で論文を書くことは可能である。しかし、それでは文化人類学の「論文」として査読には通らないのではないか。
  - その点は査読者の判断で、私の言えることではない。査読にこだわっているのは、論文の形式をとっているが、「本当にそうなのだろうか」という疑問である。AE3は査読を通過しているが、書く私「I」と書かれている私「me」の間に統合はなされているのか。査読が通過しているにもかかわらず、そのような分別は存在しないのかをむしろ問いたい。
- 書く私「I」というものが、さらけだされたままだとAE4となり、学術論文に落としこむ際に「I」を隠ぺいしようとするのがなされているとAE3となるのだろうか。査読が求める学術論文としての形式を整えること自体が、著者に対して「I」を隠ぺいすることを要求しているようにも思える。「I」と「me」の分裂を問題にするべきということになると、査読を通った論文の読み手は、そこに査読の過程で隠蔽された「I」を再び見出していくことが求められるのか。
  - AE3と比較するためにAE4の区分を作ったわけではない。AE4は特殊な区分で、例えば、日本に住んでいるフィリピン人が、日本語でなにかを書く。そうすることで、私たちの今までのフィリピン社会の見方をかく乱したりする。そういうのはAE4である。ただ、かく乱する要素のようなものはオートエスノグラフィーを考える上で重要である。
  - AE3については、査読の過程で論文としての整合性が求められる。ほとんどの査読論文はオートエスノグラフィーではなく、つまり、「I」も「me」も関係ない。あるのはつねに他者であり、モノである。オートエスノグラフィーでは「I」と「me」をだしていく。その際に、「I」と「me」について書く私について整合性があるのかということが、評価の対象とする。これは学術的な評価ではない。違う評価の仕方であり、おそらく著者である本人たちは「自分たちの痛みを読者にわかってほしい」と思い、論文文化している。論文というかたちでだしたときにでてくる違和感、そう

いうものを私は文体に求めている。それは、ある意味で著者が求めている苦しみを共有したいという考えと全く別の視点で、彼らの論文を評価している。オートエスノグラフィーの AE3 を評価する際に、この視点は無視できないのではないかというのを本報告では提案している。

#### <エスノグラフィーと「me」の存在について>

- エスノグラフィーとオートエスノグラフィーは本質的には変わらないのではないか。オートエスノグラフィーになると、「I」と「me」が顕在化してくる。「I」は分析する主体なので、通常の「エスノグラフィー」においても研究する主体としての「I」が論文を書いている。また、書いている対象の中に単に他者がいるだけでなく、実は書かれていなくても「me」が存在している。理解していく私「me」が存在している。文体としてもでると思うが、これまで問題視されてきていない。
- オートエスノグラフィーになると「I」が顕在化する。それは、私が登場人物になってくるからである。オートエスノグラフィーでは、「me」の苦しむ過程が顕在化しており、それを「I」が書いている。そのため、オートエスのグラフィーでは、「me」が登場する。
- オートエスノグラフィーの登場により、「I」というアカデミズムの主体が変わってもよいという、方向になってくるのではないか。オートエスノグラフィーで暗黙の前提となっていた「me」を登場させたという意味で、これが本来の正直なエスノグラフィーと考えてもよいのではないか。

#### <オートエスノグラフィー AE3 について>

- AE3 に分類される、マイノリティ (例. アイヌ、在日華僑華人) の私語りを読みもやもやしていた。いわゆる「オート」ではない人でもかける民族誌を、カテゴリー的に「オート」なる人が書いたものとして区別する意味はあるのだろうか。一方で、AE3 に分類される、自らのトラウマを語るオートエスノグラフィー (例. 北村, 2022; 中村, 2012) では、「ethno-」が抜け落ちており、「me」と「I」が同時に立ち上がる。「meのみ語る」や、「Iのみ語る」ということが原理的にないのではないか。どちらがオートエスノグラフィーにふさわしいかはわからないが、これは定義の問題である。
- AE3 は、学問的に分析的な「オートバイオグラフィー」である。なぜわざわざ「エスノグラフィー」と名付けなければならないのか。
- AE3 における「エスノグラフィー」という言葉の使い方だが、「ethno-」について考えられていないのではないか。その関心を再度回復させるための方策が2つある。ひとつは、「ethno-」を民族集団、文化集団とみなさずに、人間のあるカテゴリーとみる。このカテゴリーに関わるものを「ethno-」と考え、それをテーマとした論文をエスノグラフィーと考える。もうひとつは、文化人類学者・民族学者のいわゆるフィールド学者が

これまでフィールドワークにより見いだしてきた「ethno-」の在り方から「ethno-」を除きフィールドワークのみに限定する。対象はなんであれ、フィールドワーク的なことをすればエスノグラフィーとする。おそらく社会学者や文化研究の研究者が考えているエスノグラフィーの定義はこちらだろう。

- 文体を考えたいとのことだったが、AE3は「私小説」なのではないか。私小説では、自分の文体をつくりだそうとするが、人類学者はそちらの専門家ではないので、論文というかたちに落としこんでいるようにも思える。仮に、「私小説」というものを「オートエスノグラフィー」であると考えた際には文体の分析を行うのか。
  - 文体を問題にしると述べているわけではなく、こういうエスノグラフィーは論文というかたちをとっていても、そこにはなんらかの亀裂がみられるのではないか。他の論文と同じように自分に関し客観的な記述、分析をしており、論文として読めるし、査読も通っている。しかし、それだけでは不十分なのではないか。

#### <オートエスノグラフィーの客観性について>

- オートエスノグラフィーはなぜ流行っているのか。
  - 不確実な時代で、確実なのは私の体験だ、私自身だ、というような雰囲気があるのではないか。20年前は客観的なものに変換することが重要であるという雰囲気があったが変わってきたように思う。
- オートエスノグラフィーの著者は、「客観性が担保されない」ことを悩むが、客観性はアカデミズムにおける様式の問題にすぎない。査読につながる問題である。オートエスノグラフィーは、「客観性とはなにか、主観性とはなにか」というひとつの様式の問題も含め、アカデミズムの書き方を変える契機にもなりうるのではないか。
  - エスノグラフィーは、人類学者が聞いたものや見たものをデータとして提示し、分析する。本来はフィールドワーカーとして人々と交流した私 (me) は消し去られており、そこが批判されてきた。そのため、私 (me) を登場させようというのが、AE1のカテゴリーである。フィールドワーカーである私 (me) を可能なかぎり登場させる。他者を単に記述するだけでなく、私 (me) を登場させることでバランスをとる。そういう様式が登場した。しかし、私 (me) を登場させる私 (I) は、記述の外にあり、その点も批判されていく。
    - オートエスノグラフィーはさらにそれを意識したものである。トラウマで苦しんでいる人類学者が自分の体験について書く際に、たとえ論文という形式をとったとしても、その文体になんらかの亀裂があるのではないかと考えている。自分について書いているようにみえても本当に隠蔽したいものに関して結局は書かれていないのではないだろうか。
- マイノリティであるがゆえの経験について、客観性を担保しておくことは学問として必要である。おそらくそれは文体ではなく、苦しんでいる個人が、その状況をつくりだ

す構造や社会を含み「I」や「me」を対象化して語れるかということが重要なのではないか。例えば、沖縄の在日の人を書いた、その個人のをそのままそのカテゴリーの代表とするのは人類学としてはどうか。

→ ある集団における「代表」という考えは、ある種の妄想でしかないのではないか。  
例えば、狩猟採集民とは何かというと、自分のフィールドに基づき検討するしかない。

- 「客観的視点」というのは、その個人を取り巻く周りの構造まで個人の視点でないところで著者が書けていたか、ということである。この点は、「オートエスノグラフィー」においても重要ではないか。
- 事例にあげたオートエスノグラフィーの著者は傍観者・観察者となっている。文章のなかでは客観性が感じられる。

#### 野生チンパンジーの道具行動の機能と進化： 機会仮説か必要仮説か

(山越言)

要旨：

準備中

質疑応答と主な議論：

##### <イノベーションの定義>

- イノベーションの定義とはなにか。  
→ それまで行われなかったことが、行われるようになることである。1回でも問題なく、それは伝播定着しなかった事例となる。
- イノベーションを「以前なかったものが新たに生まれること」としたら、なんでも含まれるのではないか。例えば、石器でかゆいところをかいたらイノベーションなのだろうか。かたちは同じだが、使い方を変えるということもあるかもしれない。
- 三つ叉状のすくい棒での水藻すくいの事例は、イノベーションにあたるのか。  
→ 一定期間観察されておらず、噛んで加工するということが観察できたら、定義上は「イノベーション」である。おおよそは最初に観察される棒の加工のバリエーションのなかに含まれているように感じるが、非常に幸運な場合は「ある個体によるある改変がみられて、それが広まっていくか、それとも1個体の中にとどまるか」を観察できるような状況があればなおよい。  
→ 1例のみではわからないがボツソウのチンパンジー研究（60年間）の範囲でなにかが検出できたことになるのかもしれない。

#### <イノベーションの頻度について>

- 60年間のなかで、ボツソウのチンパンジーではイノベーションが観察されていないということは、イノベーションはチンパンジーでは生じにくいのか。
  - 60年の時間のなかで、あまり議論しても意味はないかもしれない。リスト化されているものは60年より前にイノベートされており、すでに定着している。すでに全ての群れの個体が行うというような、主要レパートリーに関しては動的な面はみえていない。チンパンジーでは、次々とイノベーションが起こるということはないのではないか。
  - イノベーションの発生率というのは、それぞれの種で決まっているという話しはありえるかもしれない。例えば、種間比較の研究で、ボノボは他個体に注目し、チンパンジーはモノに関心をもつということが分かっている。そして、ボノボと比較し、チンパンジーは道具使用をしやすいという傾向がある (Kano *et al.*, 2015)。
- 人間と比較すると、チンパンジーではイノベーションの頻度は低いのか。
  - 比較対象が、現代のヒトとなると、チンパンジーとの差が大きすぎる。トマセロのラチェット効果の行動の想定は、いつからだろうか。100-200万年前のホモ属に累積文化があったのかという議論をしたほうがよいのではないか。トマセロが想定しているのはもっと後の時代のヒトの話なのではないか。

#### <伝播速度について>

- イノベーションを引き継ぐことも重要である。ナッツ割りの発達研究は、主にフィールド実験場での話しだが、そもそもエネルギー収支を上回るほど食べられるようになるには時間がかかる。食物が密な環境で、モデル(親)がつねにナッツをガンガン割り、子がそれを学習するという状況でも、それを効率よく割れるようになるまでには時間がかかる。人間の先行研究から、ある意味、人間の子どもはワンチャンスで学習することがわかっている(例, Meltzoff, 1995)。チンパンジーの道具使用の発達がおもしろいのは、チンパンジーの子どもは収支があわなくてもナッツを割ることである。伝播速度については、学習者側の特性がキーとなっているのではないか。
  - 現在、観察できるのは、世代間伝播の観察のみである。真の意味での水平伝播は観察されていない。飢餓状態下で、カタストロフ的な状況下にある際に誰かがなにかをするとばっと広まるような気はする。野生個体は保守的で、例えば、ウガンダのブドンゴ森林のチンパンジーはハチミツの獲得について基本的に従来のやり方を変えないことが分かっている。野生下では、日常が定常的であるところでは保守的なかもしれない。実験室のチンパンジーはいろんなことをするため、潜在的な能力は持っており、野生下においてもカタストロフ的な場面では、その能力が発揮されるのではないか。

- 昔、マハレではチンパンジーにサトウキビをあげていた。最近、隣の群れをサトウキビで餌付けする人がでてきた。昔、サトウキビを食べたことのあるチンパンジーが、そのサトウキビを食べだすと、10分ほどでいっきに群れの他のメンバーもサトウキビを食べ始めた。初めて食べる個体も含まれていたが、すぐに食べ始めた。そのような機会があれば、集団内に短時間で広がることもあるのではないか。しかし、食物レパトリーはいっきに広がるが、道具使用は技術の獲得に時間がかかると思う。
- 例えば、正しいはしの使い方には習得に時間がかかりかかる。獲得時の隠されたコストではないか。幸島のニホンザルは海水に小麦をばっとまいて、小麦の砂のよごれをとる。これは、海水の道具使用である。幸島のサルでこの行動が広まったのは、習得時間が短かったためなのか。
  - 習得時間については考えられていない。幸島のサルも技術の獲得には時間がかかっている。全個体できるわけではなく、やらない個体はやらない。

#### <行動面でのイノベーションについて>

- 今回の発表では、イノベーションの事例を道具に限定している。道具以外も含めたらより事例があるのではないか。
  - チンパンジーのイノベーションのリストによると、道具使用が多いというわけではない。コミュニケーション的なものも多い。それも、結局は「あるときに誰かが変なことをした」ということがほとんどである。
- 最近、若いチンパンジーのオスが腹をたたく行動をするようになった。そのオスよりも若いメスもまねをして腹をたたくようになった。ヒヒに対し、その若いメスがお腹をバンバンとたたいていた。ちなみに、チンパンジーとヒヒは緊張関係にあり、ときに若いチンパンジーはヒヒに石を投げることもある。
- マハレのチンパンジーには「プレハブをたたく」という行動がある。チンパンジーがプレハブたたきを開始したのは日本人研究者がプレハブを持ち込んで以降の行動である。これはイノベーションだろうか。
  - ゴンベのジェーン・グドールのブリキ缶の話もリストに含まれていた。確実にそれは新しいというのがわかっている行動は「イノベーション」として含まれている。
  - しかし、それらの事例がイノベーションであるかは人間側の判定であることを考えなければならない。プレハブたたきは、板根たたきの延長かもしれない。プレハブをたたくことは、「板根たたき」のつもりだったら、イノベーションではない。しかし、当のチンパンジー同士でも当人は「特別なことをしていない」と思っているが、他のチンパンジーは「おお！」と感じているかもしれない。
- 「これはイノベーション」と評価するということが、イノベーション研究では伴っていないとならないのではないか。

- 長く研究を続けていると、逸話的なものは観察できる。タイのチンパンジーがよく行っている「木の上でナッツを割る」という行動を、ボツソウのチンパンジーで1度のみ観察したことがある。その際は、チンパンジーも興奮していた。それが傍証になるかもしれないが、彼らにとっても初めてということはわからない。結局、人間がイノベーションかどうかを判定している。
- 小さなチンパンジーの子どもが、上向きの木のうろに水がたまったのを鏡のようにのぞき込みピチャピチャとたたき遊んでおり、7・8歳のメスがその様子を後ろからみていた。その後、その7・8歳のメスが車の通る道の水たまりで自分の顔を見ているのが観察されている。それは、その7・8歳のメスにとって水たまりの鏡利用が初めてだったかもしれないというのを物語としては書きたくはないが、その個体が日常的に行っているという可能性を排除できない。やはり、断言は難しい。

#### <アブラヤシの生態学的な特性と分布について>

- アブラヤシは、耐火性があるだけでなく、風にも強く、ツルに規制されない。発表中に、ボツソウのアブラヤシの景観の写真があったが下生えがないのはなぜか。
  - あのアブラヤシの下は、畑である。アブラヤシは、陽樹であるため、光が入ってこない場合は枯れてしまう。なにがしかの仕方で火がはいるとアブラヤシが有利になる。
  - ガボンでもアブラヤシは常緑樹が覆うと比較的早くなくなってしまう。林床に日光が届かないと発芽して成長するプロセスがおこらないため、森の中でアブラヤシが生えることはない。
  - タンザニアのマハレではアブラヤシより高い木がない。他にあまり高い木がない。マハレでは、もともと人が植えたアブラヤシがその後、世代個体しているようだ。マハレはかく乱要素が大きいのではないだろうか。
- 考古学者の論文を読む限りではアブラヤシの花粉や実の痕跡が遺跡からみつかり、開けた環境がそこにあったと解釈する。ある種のメルクマークとなっている。西アフリカ熱帯林では、火と伐採とアブラヤシと *Canarium* で人は森の中に入っていく、それがないと人間は森のなかで生きていけないという話がある。アブラヤシの花粉がみつかりと人間の景観管理に関して信頼できる話しになるのではないか。
- アブラヤシの生態学的ニッチは地域により異なるか。
  - そういう風には認識されていない。歴史的には、アブラヤシの分布は、西には8000年前から花粉があり、コンゴ盆地まで広がるのは4000年前以降で、比較的近代にタンザニアへと広がった。入口はキゴマである。そして東に拡大していった。

#### <チンパンジーの土地利用について>

- いつから人間はボツソウ周辺に入ってきたのか。

- 近隣地域で考古学的な研究があるが、アブラヤシの花粉の痕跡やセラミックをもちこんだ人たちの痕跡が残っているのは、4000-5000年ぐらい前からである。森の真ん中には、人間がいたとしても狩猟採集をしている森暮らしの人が低頻度でいた程度だったのか、痕跡はほぼない。定住農業のはっきりした痕跡は2000年前あたりである。遺跡が散発的であるが、当時の人は遊動民だったと推測されている。
- 里山二次林的環境は西アフリカのチンパンジーにとって魅力的な環境であるが、ムサンガが優先となっている環境を「里山二次林的」としたい気持ちになる。2つのタイプの二次林(ムサンガ/アブラヤシ)があるということか。
  - 二次林が2タイプあるかということ、今は焼き畑を行うので、遷移的な意味で、区分は1つでよいのではないか。火が入ればどちらも存在する。  
畑(焼き畑) → 藪 → ムサンガ → 森  
焼き畑(火入れ) → アブラヤシ
- 4000年の間、人間の活動があったから、ムサンガ林にならなかったのか。
  - 動物を狩るために火入れしていたとしたら、ムサンガ林はあった。あっちにいたりこっちにいたりしながら、そこら中を少しずつ焼きながら移動する人々だとすると、焼き畑はその後ムサンガが生えるような二次林になる。全部一体として、火が入ればどちらも存在する。
- 熱帯林的チンパンジーと二次林的チンパンジーの2タイプがいるわけではないのか。
  - 生息地のタイプとしておおざっぱに分類すると2種類あるが、1つの群れのチンパンジーがその2種類の生息地タイプを全て利用していると考えてよい。遺伝的に広域なポピュレーションとしてはそうである。連続している。
- その4000年のあいだ、チンパンジーは変動する環境のなかで、熱帯林も二次林も全て利用して生息してきたため、人間のように完全に道具使用をするものにならずに留まっている、つまり野生チンパンジーの道具文化は累積的文化の一手手前で留まっているということか。

#### <アブラヤシのナッツ割り:道具使用の進化について>

- 挿入探索的な道具使用は、チンパンジーにおいて、かなり進化史的に古い時間から組み込まれている。そして、人間が西アフリカでアブラヤシを増やしたため、4000年前ごろにナッツ割りのイノベーションが西アフリカのチンパンジーで起きたというストーリーとなるのか。
  - そうである。アブラヤシが入ってくるのが遅かった中央や東アフリカでナッツ割りがおきなかったのは、アブラヤシの暴露時間が足りなかったという解釈である。
- 例えば、アブラヤシではないが食べられるナッツ(例、コーラ)は中部アフリカにもある。しかし、それを割る中央チンパンジーはいない。西アフリカのナッツ割りはハイパーアベイラブルなアブラヤシがナッツ割りの対象となる。割る技術の見返りが大きいと

ということもあるのか。

→ Kortlandt (1986) の「ナッツ割りの人為的起源説」の解釈でいうと、アブラヤシでナッツ割りが進化した。コーラなどの他のナッツは、東も西もほぼ同じ条件で分布していたため、西アフリカで優先的に起こる理由はない。しかし、アブラヤシは西有利である。私はアブラヤシ起源を強く推しているわけではないが、仮説として棄却はできない。

→ 一方で、4300年前にチンパンジーのナッツ割りの「遺跡」がコートジボワール・タイ森林で発見されており、タイでナッツ割りが進化し、周辺の里で広がっていったという説もありえる。

- 4300年前の当時の人間はチンパンジーを狩猟してはいなかったのか。
  - 火入れし空き地をつくり、夜中に待ちぶせをして狩ることはあったかもしれない。
  - そのような論文を読んでいないだけかもしれないが、狩猟した動物の骨はできていない。人為的な環境にもチンパンジーは生息していたし、狩られていたかもしれない。西アフリカの二次林的な人為的な環境においてもチンパンジーのネストはみつかるため生息しているが、あまり声も出さないため観察も難しい。今の人為的な環境と同様に、昔もチンパンジーがいた可能性はある。
- チンパンジーの道具行動への hard-wired な行動傾向についての話しだが、西アフリカのチンパンジーは分岐としては古いという説もある。割る行動に関して、西アフリカの方は行動傾向として持っているが、東アフリカはそういう行動傾向はないということはあるのか。なんらかの理由で、西アフリカでは、「石をたたく」という行動傾向をもっていると、アブラヤシに暴露された際に、より道具使用につながりやすいという効果もあるのではないか。
  - 暴露時間をどう推定評価するかを考えなければならないが、ありえると思う。サハラの拡大縮小の話しを考えると、1万年くらい前にサヘルが広がり、かなり際まで砂漠だった。そこから湿潤化し、1万年前から4000年前まで中間的な環境であったという事実からアブラヤシの暴露時間を求めることは可能かもしれない。

#### <アブラヤシの味：コーラ (Coura) ナッツとの比較から>

- アブラヤシのおいしさについて、チンパンジーの主観的な価値はどのようなものなのか。たくさんアブラヤシのナッツを食べているとしたら味覚の適応 (嗜好性) ができてもよいのではないか。
  - 人間的には、アブラヤシのナッツはおいしくない。コーラのナッツの方がおいしい。採食生態学的な研究によると、コーラと比較し、アブラヤシはチンパンジーに好まれてない。アブラヤシは年変動があるが、アベイラビリティを考慮した際には選好性は低い。栄養に関しては、アブラヤシとコーラは同程度である。
- アブラヤシとコーラのナッツをペースト状にし、2つを与えたら選好性はでるだろう

か。

→ 試してみないとわからない。

#### <オポチュニティに対するネセシティ>

- なぜ「オポチュニティに対するネセシティ」のような議論になるのだろうか。研究者文化によるものか。
  - 「必要は発明の母」という言葉があり、現代人のもっている常識が研究に入りこんでいる。「おなががすいたら発明する（必要仮説）」という仮説は通りがよい。落とし穴は「必要仮説」の方にあるのではないか。回路付けされているような思考があるかと思う。
- 「ネセシティ」は動機として見栄えがよい。しかし、文化は「ネセシティ」ではない。そのため、イノベーション論もいろいろあるが、「必要ないのに考える」というところがポイントなのではないか。
- 「ネセシティ」とするのは、適応的な視点があるからなのではないか。
  - オポチュニティの方も適応的な視点から話しができる（例、最適採餌戦略）。新しい技術が発明されたら新しい収穫ができるというのは、私たちの頭のなかにあるイノベーション像である。進化的な文脈とは異なる。
- チンパンジーの道具使用などのイノベーションは進化的なタイムスパンでとらえるべきだと考えているのか。
  - 仮説を提唱している研究者は、1年でみられる現象を想定している。いわゆるティンバーゲンの4つの問いのなかでは「機能の問い」をしている。
  - にわとりが先か卵が先か。機能で考えても、結局個体レベルに落としたりしたら個体の動機を考えざるをえない。機会が少なくなったら食べなくなる。この対立項が論理的にクリアに分けられない印象はある。
  - 最近の研究者は必要仮説と機会仮説は、「相互排他的ではない」という文章を論文に含めている。いろいろ批判があり、最近は対立しないからおもしろくない。しかし、そこにはまだフォーカスをあてている。やはり、言葉として流通しているのではないか。

(以上)